

2021年6月5日(土)

老球の細道613号

尊敬するコーチ新井春生先生との出会い②

会津バスケットボール協会 室井 富 仁

新井先生と直接会えるようになったのは、先生の著書『清らかな汗』を介してである。この時の経緯が1996年に発行された先生の別著『高き理想を求めて』に掲載されている。その原文で先生との運命の出会いを説明したい。〈先生の本に私の文章が掲載。感激、感動〉

【新井春生先生に出会えて

福島県 室井富仁

「熱心は最低のレベルであり、県代表レベルである」

新井先生のこの言葉を眼にしたのはかれこれ20年くらい前になるだろうか。当時、インカレを短大で制覇した先生が、あるバスケットボール月刊誌の中で語っていた言葉だったと思う。〈人との出会い〉にまけないくらいの〈言葉との出会い〉を感じた。他人から「よくがんばっているなあ」とか「熱心だな」言われて自己満足していた私に強烈なクサビを打ち据えられた。案の定、当時の私はコーチとしても、プレイヤーとしても、まさしく県代表止まりだった。

新井先生が率いる当時の市短大バスケットボールは、私にとって畏敬のまどであった。見るたびに感動とバスケットの新しい発見を与えてくれた。新井バスケットボールを見るために、毎年のように福島の田舎(大学生時代)から東京代々木第二体育館へと足を運んだ。当時のスーパースター大塚宮子、中村千代美、児玉紀子選手などに見られるポストピボットプレイ、チーム独自のワンハンドフリースロー、そしてトリプルポストチームオフense。どれをとってもその独創性と芸術性には驚かされた。それからである先生の隠れ信者になったのは。先生に関する情報は、あらゆるところから探し出してむさぼり読むようになった。

念じ続ければ必ず花は開く。想い続ければ必ず出会えるものである。

それから10数年後の1989年先生は『清らかな汗』という本を発行する。そのことを新聞で知った私はすぐに馴染みの書店に注文した。その本が手元に届くのを心待ちする一日の長かったこと……。ところが、心待ちにして待っていたのにもかかわらず、馴染みの書店からは「本は絶版でありませんでした」という冷たい連絡が来た。それでは直接出版社に少しでも残部がないかどうか聞いてみようかと電話した。残念ながら「もうありません」と出版社からも同じ返答をもらった。どうしてもあきらめきれず、意を決して最後の手段をとることにした。先生に直接お願いすることである。元来小心者の私にとって結婚を決意する時に次ぐ一大決心であった。

「願えばかなえられる」

いつも生徒たちに指導していた言葉を、この時は私が行動で示す時であった。ダメで元々。無礼を承知で、小学校低学年以来頑固に通してきた文字で、本が残っていないか、もし1冊でもあったら譲ってもらえないだろうかという趣旨の手紙をしたためた。「清らかな冷や汗」を流しながら】

〈続く〉